県立篠山東雲高校のビオトープで開かれた田んぼの生き物調査講習会＝丹波篠山市福住

「農都のめぐみ米」をPRするのぼり＝丹波篠山市西吹

自然に優しいお米 丹波篠山市の恵み

生き物に配慮 市内の学校給食へ

丹波篠山市は豊かな自然環境を未来へ引き継ごうと、農薬や化学肥料の使用量を減らし、生き物に配慮した栽培をする「農都のめぐみ米」の普及を進めている。今年は11の営農組合などが栽培に取り組んでおり、取れた米は市内の学校給食に使う。

同市は武庫川、加古川、由良川の源流があり、農都のめぐみ米の栽培では、代かきで濁った水ができるだけ下流に流れ出ないようにする。慣行基準に比べて農薬や化学肥料の使用を半分以下にし、土づくりに稲わらや堆肥（たいひ）などを使う。

稲の害虫であるカメムシを捕まえるカエルの生息環境に配慮し、田んぼの水を抜く「中干し」作業を、通常の6月中旬からオタマジャクシに脚が生える6月下旬から7月上旬に遅らせることも取り組みの一つだ。

栽培を本格的にスタートさせた昨年は58の農家が取り組んだ。これまでに実施した生き物調査ではドジョウやコオイムシ、タイコウチなどが確認されたといい、栽培に取り組む農業団体の関係者は「生き物が豊かな田で育った米は安心感につながり、消費者へのアピールになるのでは」と期待する。

市は田んぼにのぼりを立てて農都のめぐみ米をPR。今後食味や収量なども検証していくといい、市農都政策課の担当者は「農都のめぐみ米を付加価値として、安定的な米の販売にもつなげたい」と話す。

「農都のめぐみ米」の他にも、同市は環境に配慮した農業の普及を進めている。7月には農業者を対象に、県立篠山東雲高校の教諭や自然科学部員が講師になり、同校のビオトープで生き物調査の講習会を開催。休耕田を活用したビオトープ作りや生き物が暮らしやすい環境に配慮した水路整備を支援しており、市農村環境課によると、昨年度はビオトープは市内約30カ所、環境に配慮した水路は延べ100カ所で取り組まれているという。（前田智）

2021年9月1日
朝日新聞